二〇一八年四月二〇日

ペン先に滲むインクや春愁ひ　更紗

葉桜が日の斑を落とす石畳　せいじ

緑陰に集合したるヨガマット　さつき

二〇一八年四月一九日

巡礼のリュック筍のぞきをり　なつき

緑さす聖書日課の窓辺かな　せいじ

二〇一八年四月一八日

薔薇の蔓宙つかまんと伸びにけり　もとこ

ケーブルカー若葉の森へ消えゆきぬ　満天

二〇一八年四月一七日

陽をはねて菜の花畑の広がりぬ　敬和

雁行の歩板に愛づる花菖蒲　ぽんこ

チューリップ天使の像を取り囲み　満天

払ひもす仏足石の春塵を　なつき

温泉の街の川面にゆらぐ春灯　愛正

二〇一八年四月一六日

参磴の天蓋となる大桜　そうけい

展けたる海原のごと麦青む　明日香

鶯の声に机上のペン止まる　敬和

二〇一八年四月一五日

風光る堰落つ水のしろがねに　菜々

一茎の水仙あらぬ方へ向く　敬和

落花舞ふホーム特急通過中　はく子

遠足子らが垣なせるパンダ館　宏虎

二〇一八年四月一四日

買ひすぎとわかつてゐても種袋　明日香

謂れある信長塀や花は葉に　たか子

毎日句会みのる選・二〇一八年四月二二日